

SOCIAL 未来に繋げる CREATORS INTERVIEW デザイン

——デザインという手段を使って、社会問題に向き合っている人たちに訊いてみた

将来デザイナーとして社会問題に向き合ったとき、私たちには一体何ができるのか？



デザインを通して、社会問題を考えている人たちに「これから」のことを訊いてみた。

LABORATORY 05 002

平成 22 年 3 月 28 日 「SOCIAL CREATERS INTERVIEW」 『LABORATORY 05 これから』

Kazuo Kawasaki Ph.D.



デザインディレクター・医学博士
川崎和男

PROFILE: 川崎和男。1949年生まれ。デザインディレクター兼、医学博士。伝統工芸品からメガネやコンピュータ・ロボット・原子力エネルギー・人工臓器・先端医療・宇宙空間の装置化まで幅広く、研究・教育・実務活動を行う。1979年、川崎和男デザイン室を設立。1989年に発表した車椅子などはMoMAニューヨーク現代美術館に永久収蔵される。現在、大阪大学大学院工学研究科・医学系研究科教授、名古屋市立大学名誉教授、多摩美術大学客員教授、金沢工業大学客員教授などを勤める。

002

川崎さんは人工心臓や車椅子のデザインをされていますが、デザイナーの立場から医療に関わるようになった経緯はどういったものだったのでしょうか。

まず大きなきっかけは、やっぱり自分が車椅子生活になったからです。28歳のときにタクシーに乗っていたら、酔っぱらい運転に追突されて車椅子生活を余儀なくされたのです。

退院してからは、赤坂に事務所を開きました。10人ぐらいのスタッフがいまして、たくさん大ヒット商品を出して、三日で二百万円とか、こう思わず毎日が笑顔になるほど稼いでいました。するとやっぱり体が悪くなったり熱が出たりするんですね。よく診てくれている先生に、「私もうだめだよね」とって言うと、「何言ってるんだ頑張り」ってけっけっけ励ましてくれました。私は自殺とかそういうことをまったく考えない楽楽家なんです。車椅子になったときだって、「あー、車椅子ですか」という程度でした。

けっけっけ神経質そうに見えるかもしれないんですけど、わりとお気楽タイプなんです。

——現在デザインが関わっていないことで問題と感じているものはあるのでしょうか？

今は一番どうしようもないことにデザインは取り囲まれています。それは、癌¹³のステージ4の人。その人たちの終末の医療が見つからない。癌には必ず痛みがあります。ペインクリニックの必要性、たとえば痛みをやわらげる部屋の色や天井はどういうものだろうかって研究している人たちが支援できるということに、日本のインテリアデザイナーはまだ気付いていません。だからホテルのインテリアができる人は、終末期医療をするようなホスピスのデザインもぜひやってほしい。そのためにはやっぱりそういうデザインコースが必要になってきますね。そのコースでは理論的研究者からまず学ぶ。そして私たちはそれを感覚や感性で受けとめて、実務的に設計していく。それがへたな建築家やったりすると、見るも無惨な環境になるものが多い。例えば小児病棟¹⁴ってあるでしょ。子供だからってマンガのキャラクターが並んでいるのが本当に良いのかって言うと違います。北欧のレヘル¹⁵を見る

と、日本みたいにマンガは描いていません。子供に合うカラーコーディネートには必須です。子供の視力は基本的には6才くらいまでは0.8くらいで1.5はないわけです。刺激が強いものは視力的に悪いので、やわらかい色のストライプやきれいでやさしい色が必要です。だから、そこにマンガを描くのが必ずしも子供にとって良いわけではないですよ。そういうようなところに大きな違いを感じます。だから、桑沢の所長の内田繁さんにはお願いしたいですね。ホスピスにはインテリアデザインが本格的に必要ですから。

それから薬のパッケージデザインはまだ不完全です。薬を見た瞬間、これはぜったいお茶で飲んじゃいけない、これは朝に飲む薬だなんてわかるような形態を發明しなきゃいけない。でもまだ製薬業界自体がデザインが不可欠だと思ってくれていない。点滴のバックなど、たとえばそれがある企業の機器には合うけども、他のメーカーにはまったく合わないとかね。私はよく入院するんだけど、点滴するときにね、看護師さんに「機器メーカーと薬剤メーカーが違うよ」と言います。

——本当にプザァーが鳴ったりするんですよ。点滴バックはきっちり制度的に標準化や基準化を決めたほうがいいですね。そういうことを制度的に成立させることがこれからは大事だと思っていてます。

日本はもう家電製品は他の新興国にまかせればいいのです。むしろ僕が今やっている人工心臓のような高度な医療機器をやってほしい。この前東芝に行ったときに私が言ったんです。家電やめたらどうですか。あそこは今、原子力をやっているからね。だから僕は原子力やりたいって言ってますよ。デザイン部門が原子力開発へのデザイン導入をまかなえるかっていったら私は難しいと思ってるんですよ。だから、私がやりたいんですけれどね。

川崎さんの命に対する考えを教えてください。

この前「いのちを守るデザイン」という本が出版されました。「命を守る」デザインなんて思っただけで、こんな本が出てくるんだけって自分のスタ



009 LABORATORY 05

LABORATORY 05 008

出来ない。だから、命と「向き合う」。たとえば癌患者の終末期医療の環境を整えてあげる、看護師さんたちが働きやすいような環境にしてあげる、そういうふうにして「命と向き合っていく」姿勢が必要だといっています。私の研究室は命を守っているのではなく、「命と向き合っている」研究室だっことをもう一度自覚してほしいと思っています。

阪大の学部出身の子に、君は何しにここに来た？って聞いたらヘアドレイヤーのデザインをやりたいと。馬鹿モンって言いますよ。専門メーカーの名前も知らないでやれるかって説教します。そしたら彼を一番かわいがってくれていたおじさんが癌になったんです。先生、癌になっちゃったって言うから「歳は？」って聞いたら50代、若いなって。今ステージいくらかって聞いたら、ステージ4。今の治療法っていっぱいあるから、自分で徹底的に調べなさいっていました。うちの研究室はそういう資料がいっぱい揃っていますから。それを読んでいくうちに、「先生、僕も医療関係やる」っていいました。やっぱりほら、身内の

好き嫌い、嘘本当、損得、正しい悪い。それらを関係づけることになりません。嫌い、絶対嘘、絶対自分は損する、でも世の中にとっては正しい。そういう判断をできる人はすごく優れた人だということです。ところがそういう人が今は少なくなっちゃいました。自分勝手になると好きで、本当っぽくて、自分が得して、それで正しいことだったらOK。でもそれが社会的な悪だっということがすごく多いんですよ。美しい価値観というの



「本当にこれはなんか持ってるぞって言うものに対して、素直に自分が感動する力を持つることなんだよね」

いであげますが、私は立場的に自分がつくるもので、ほら、ここまで完成度があるんだって見せなきゃいけない。だからたとえば、今、携帯電話を見ててもヘタクソなデザインだなんて思う。ダイソンの羽根の無い扇風機が出てきたでしょ。それしたら、なんで日本のデザイナーは今まで怠けていたんだろうと思ふ。負けてるって思

「デザイナーは命を守ることはできない。だから、命と向き合うんだ」



おじさんの命と向かいあったから、動機が変化したんです。結局は、おじさん亡くなっちゃったんだけど。でも今、希望聞くと、医療関係のほうに行きたいって行って、先輩の実験を手伝ったりして一所懸命やっていますよ。だからそういうことです。人の命の大切さは、身内のことがあれば真剣に考えることになりました。だから客観的に捉えることがデザインには不可欠です。少し話が飛びますが、横田さん夫妻も歳とっていきいんだから、早く娘さんを取りもどそうって思うんです。生きてる間に、政府は何やってんだ！って思います。川崎さんは「いのち・きもち・かたち」についてお話されていますよ。建築家の菊竹清訓氏の「か・かた・かたち論」ってあるでしょ。私は、あ

は、たとえば自分が嫌いな色であっても、本当にこれはなにか価値があるなっていうものに対して、素直に、自分が感動する力を持つていることなんです。現在のデザインに対して思うことはありますか？

は、たまたま自分が嫌いな色であっても、本当にこれはなにか価値があるなっていうものに対して、素直に、自分が感動する力を持つていることなんです。現在のデザインに対して思うことはありますか？

私は定義が少なすぎると思っっています。私は「か・かたち・かたち・かち」。価値って何かわからないでしょ？一般の企業の人たちにもあなたの価値ってなんですかって聞いたら、みんなとまどいます。望ましいこと、望んでること、好ましいこと、が価値なんだよね。好ましいことってというのは、自分が好きだっという主観的なことです。でも「このかたちが嫌いだ」とか「色も嫌いだ」とか。そんなの誰でも言えますね。子供がいちばん最初に価値判

断するときには、「誰々ちゃんはこの色が大好き」っていうことから始まりです。好きか、嫌いかわからないんです子供には。中学生くらいになつてくると、「大人なんてさ、嘘つきが多い」という「嘘」か「本当」かっていう話になります。就職するぐらになると、「儲かるかなー、損するかなー、得するかなー」としたたかに考える世代になります。それはもう価値観の話なんです。望ましいとか、好ましいとか。でも正しい、悪いって判断に至ります。

じゃないとわからないことがたくさんあります。現場で働いて、それこそパートのおばちゃんの気持ちだとか、モデル屋さんの気持ちがわからななさいけないと思います。そういう経験をして、経験を積んで素材メーカーに飛び込んでいってもちゃんと話ができる、経営者相手にも経常利益とか、純利益とか、議論できることが大切です。今のデフレ傾向に対して、次はどういう時代が来るか、という話も経営者相手にできななだけですよ。そういう日常的なものの見方や経済の論理を知るべきです。これからのものづくりについてどう考えられますか？

ンカしたとき、仕事はきれいなものを創らなきゃいけないのに、クソ、って思いながらつくると、なんてことがあるよ。この車椅子を造る前、まだ市販の車椅子に乗っていたときね。汚い車椅子に乗っている自分は汚いんだなって思っていたわけですよ。そういうのって嫌でしょ。で、私の奥さんけっこう美人でしょ？ 朝起きたときに

「それらを汚いと思わせないということは素晴らしい行為なんだ」



横にいる人がさあ、美人じゃなかったら嫌なんですよ。前の晩にじっくりケンカしたって、朝起きたときに「おはよう」って言うってくれる顔が笑顔だったらうれしいもんな。そういう環境に日常取り囲まれていたいんです。私はちほそういう美しいモノを創る仕事です。でも体の中から出すモノは汚いんだよって思っています。あなたの考えは汚いんだよって。だっておしっこ出しているようなものだよ。鼻水出しているようなものだよ。それは本当

は汚いものなんだけど、できあがったものはかっこいいね、美しいねってみんなが思ってくれる。だから、ごめんねって言わなきゃ。ほんと、ごめん、それ実は俺のうんちなんだけどなって……ひどい話になってゴメン！
美しい、すごいって、感動したり感激したりっていうのは、現代人はけっこう忘れてるんです。私が見ている、今一番みんなが感激して、感動して、涙流して見ているのは、スポーツなんだよね。そうでしょ！オリンピック

クで浅田真央ちゃんなんか金メダルをとって、日本の国旗があがって「君が代」が流れたりしたらやっぱりすごく感動するし、それこそイチローが、もうすごいダメだと言ってみんなが彼のことポロカスに言ってたよね。でも最後にバシッと打ってくれたら、やっぱり、すごいってなって、日本中がみんな涙しちゃうわけですよ。ということ、日本人というのは、今、スポーツにはすごく感動したり感激したりしてくれるけど、素晴らしい冷蔵庫

がでてきて、すごいって、泣いてくれるような人はいないわけです。だから、そこが問題です。

私の「FORIS」というテレビがあるんだけど、量販店では絶対に売らないことにしています。専門のお店や家具店で売っています。だって、自分が設計したモノなのに、あんなに汚いPOPラベルを貼られるのはイヤですから。量販店で売れる価格のデザインしろって営業にいわれるわけですよ。絶対に拒否するよ。私がつくっているFORISはそういうのじゃないから。手間かけて造っているから、ちょっと値段は高くなるけど、本当に美しい存在のテレビが欲しいって思う人はみんな、やっぱり私を買いますよ。そのときに、「FORISを買ったからうちへ来ない？」っていう会話ができたわけです。それを聞いたときに「やったー」って思いました。テレビ買ったからうちに来て、新しい冷蔵庫買ったから来てって今いわないでしょ。だからこれからのデザイナーはさ、そういう人を感動させられるようなものを創っていかなくちゃいけないって自分自身に毎日いい聞かせています。 ■